
夢への階段

望月愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢への階段

【著者名】

望月 愛

【あらすじ】

水野透、中学3年生。バスケ部のエースだったが県大会を終え引退。そんな中、クラスメイトの望月舞がやたらと透に駆け寄ってきて……。進路、バスケの事、そして恋愛。悩みはたくさんあるのに、何故か吹奏楽をやることに!? 悩んで、頑張って、苦しんで、最後は喜び感動する。そんな青春を描いてみました。

一 段目・部活（前書き）

この話は私が中学生の時の体験を基に書いています。
稚拙な文章ですが、読んで頂けたら嬉しいです
そして、評価して頂けたらもつともつと嬉しいです！

一段目・部活

「水野君お願ひ！」

望月舞が上目使いで見つめてくる。

その目を見るとドキッとしてしまつから、右上方、つまり窓の外を見つめる。

異常気象のせいか、6月後半になつても梅雨入りしない空は、雲一つなくすがすがしい。

「何回も言つてるけどムリだつてば。絶対オレより良い人居るって。だから他のヤツ探して。」

水野透は空を見たまま答えた。

「どうしても水野君が良いの。一生のお願い！」

2時間目後の休み時間、次が体育の為教室に残っている人はほとんど居ない。透もジャージを抱え、体育館へ向かおうとしていたところを舞に足止めされた。

そんな透を見て、友達の陽介と慎は『やつきながら』お先に『』と言つて行ってしまった。

「何回言われてもムリ。次体育だから行かなきや。つてか慎達が待つてるから行くわ。」

「水野君！－」

透は舞から逃げるよう教室から出た。

「待たせて」「めん。」急いで男子更衣室に入ると、ジャージに着替えた佐々木慎と野沢陽介が近づいてきて透の脇腹を攻めてきた。

「おー、『ラーメン』やめろーー！」

抵抗してなんとかふりほどいた。

「透、朝からずっと望月に言つて寄りあわんじやん。煙の世話っ。」

慎が肩に手を廻しつつ言つてきた。

「そんなんじや無いつて。てか着替えねえだろ。」

「しかし透はモテるなあ。中学入つて何人目?」
陽介も便乗してきた。

「透、前に望月の事好きつて言つてたよな?やつたじやん、初彼女

「てか、何でOKしないの?女の方から言つてきたの?」

何も言わず聞いていた透がゆつくり口を開いた。

「…あのさあ、お前ら、違う事を『お願い』されてるの知つて言つてんだろ?タチ悪いなあ!」

「えつ、付き合つてくださいのお願いだら~?そつこいつ慎の田は笑つていい。

「お前がマジでうせー。でもそれより望月の方がだいぶウザいわ。

「こじろ日間ずっと並んでるんだぜ？何回言われたって嫌なものは嫌だつてのに。」

不機嫌な透を見て慎が言った。

「吹奏楽部の助つ人だろ？良いじやんやれば。中学最後の夏、望月と親密になれるチャンスじやん。」

そうなのだ。望月舞は透に『付き合つて』では無く、『吹奏楽部入部』を迫っていたのだ。

「だからそんなんじや無いって。大体オレはバスケ部なんだぞ？何でまた吹奏楽に入らないといけないんだ？帰宅部のやつとか、あまり活動していない部活のヤツに言えれば良いじやねえか。」

「だけどオレ、引退したじやん。」

慎が言つ。

「でも引退してからまだ1週間もたつてないんだぞ。」

透と慎はバスケ部員だった。日曜日にあつた県大会までは・・・。

「でも引退したからには帰宅部のようなもんじやん。」

慎が言つた。陽介も言つ。

「やれば良いじやねえか。オレがお前だつたら絶対OKしちゃうよ。あの望月があんなにお願いしてくるんだぜ？これをきっかけに付き合えたらサイコーじやん。」

「だつたら陽介、お前やれよ。」

「残念ながらオレはまだ野球部やらなきゃだからさあ。その前に彼女居るしー。」

「うわっ、ウザギ。」

透が言った。

陽介は野球部に所属している。大岡中学野球部は歴史があり、県で1、2位を争っている。陽介はそこの一ースピツチャー。いわゆる『背番号1』を背負う男だ。部活で期待され、可愛い彼女が居る陽介は幸せだ。

「てか透じゃなきゃダメだろ?『ビビっても水野君が良いのっ』だもんなあ。」

慎が舞をマネで言った。陽介も笑う。

「あ～お前らホントムカつべ。」

「吹奏楽、人が足りないから透に頼んでるんだろ?」

陽介が問う。

「ああ。2年の子が5月いっぱいで転校しちゃったんだって。」

「やつてやれよ」

「嫌だつてば。吹奏楽だぞ?あんなオタク部。」

「ちょっとお、オレの彼女の事オタクって言つてますか?」

陽介が不機嫌そうに言う。

陽介の彼女は吹奏楽部の副部長をやつてこむ。もちろん透も知っていた。

「ちよつ、違うつてー。コウちゃんは可愛いし、てかイメージ的なものだつて。」

慌てて弁解する透を見て2人は笑つた。

「やつてくれよ~可愛いコウちゃんの為にも。人が足りないって結構悩んでるんだよ。」

陽介が言つ。

「やうだよ、やれば絶対望月の高感度ヒュだぞ。こんなチャンス、他には無いぞ。」

慎ものつてくる。

「お前ら、人事だからって調子こきやがつて……」

「あつ、チャイム鳴つた。」

慎がぽつりと言つた。

「やべ、間に合わん。」

透はまだ上しか着替えていない。

「やべ、透先行くわ。」

「えつ、ちょっと位待てよ。」

慎と陽介は透を置いて先に行ってしまった。

透も慌てて着替え、体育館へ向かつた。

「水野、遅刻。体育館5周してこい。」

体育館へ一步入った瞬間、体育教師の太田和義が厳しい口調で言った。

「…はい。」

ホントなら、ちょっと位良いじやん……と言いたいがこの人には反抗出来ない。

3年間お世話になつたバスケ部の顧問だから。

「この前言つた通り、今日が最後のバスケットボールだ。来週からは水泳だからな。今日はくじでチームを決めて試合をするよつこ。」

透が5周から戻ると太田が話し始めた。

「じゃあ、くじ引きして、チーム」と準備体操して30分から試合開始出来るように。」

太田が話し終えると各々が動き出した。

女子の方から『水泳やだー』と話す声が聞こえてくる。しかし、透の頭の中は水泳どころでは無かつた。

舞へ視線を向けてみる。

舞は水泳の事など全く口にせず、友達と笑いながらくじを引いていた。

『かわいいなあ。』

何の苦も無くこの言葉が浮かんでくる。

さらつとした長い黒髪、ぱっちり一重の大きな目、笑うと出来るえくぼ、スッと伸びた手足・・・まさに美人の典型。憧れない男子は居ないだろう。

「透、ボケつとしてないでくじ引けよ。」

後ろから肩を叩いた後、慎は透と同じ方向を見てみた。
「またまたあ～望月にみとれちゃってえ～。」「ばつ、そんなんじ
やねえよ！～」

会話を遮る為、透は急いでくじを引きに行つた。
そんな透を見て慎は笑つた。

「透何班？」

「2班。慎は？」

「俺も！～大岡中バスケ部最強コンビ復活じやん。
まじで！～これは楽勝だね。」

そう言つて透は慎の背中を一発叩いた。

「おい、2班ズルいだろ？慎と透が一緒なんて。」

「チーム」とにわかれた時、3班になつた陽介が言つた。

「本当だよ。有り得ん！～」他の人たちも口を揃え言つた。

3年3組にバスケ部員は慎と透しか居ないのだ。

「くじなんだから仕方ない！～30分になつたからやらなきゃ～！」

慎がそう言つと、みんなしぶしぶ試合を始めた。

県大会でベスト8まで残つた大岡中バスケ部レギュラーが2人も居
れば、授業のバスケットボールなど…

「余裕の勝利だな。」

チャイムが鳴り更衣室へ向かう途中、慎が言った。

「もちろん。」

笑みを交え透が返す。

最下位だった陽介のチームは片付けをさせられている為先に着替える事にした。

「透、親何て言つてた？」

「えつ、何が？」

「スポーツ推薦の話だよ。唯野高校の。」

「ああ……。」

唯野高校は透の家から電車を使って50分位のところにある私立高校。

バスケ部は2年連続でインターハイ出場を果たした。バスケ部以外の部活も全国大会に名を残している。いわゆるスポーツ校だ。

高校でも部活を続けたいと思う人が憧れる学校。

慎と透は昨日、太田に呼び出され、唯野高校へのスポーツ推薦の話をされた。

「お前らが唯野へ行き、バスケを続けたいなら推薦をする。しかし、決めたら断れないし、絶対にバスケ部に入り、3年間続けなければならない。私立高校だから学費の事もあるし、親にも必ず相談して

決めて欲しい。』

そう言われたのだった。

「オレ、まだ話してないや。』

「話していないの?』

「昨日の今日だし…慎は?』

「言つたよ。やっぱ私立だから、ちょっと嫌がつてた。』

「えつ、反対されたの?』

「いや、『ビーせ唯野行きたいっていつて言つてた。』って言われた。』

「そつか、良かつたじゃん。』

「お前も早く話せよー。唯野でバスケ出来るなんて、何かドキドキするなあ。』

「あ…。』

「透、どうかした?』

「えつ、何で?』

「急に元気無くなつたから。』

「そんな事無いって!..』

透は慎と田線を逸らすかのよひにロッカーの中を探りだした。

「もしかして、高校歎こんでる?..』

慎が伺うよつに聞く。

「えつ?』

「昨日、推薦の話聞いた後もあんまり嬉しそうじゃ無かつたし…まさか、バスケ続けないつもり!..』

「そんなワケ無いだろ。もちろん続けるよ。』

「だよな、なら良かつた。唯野のバスケ部はオレらの憧れだもんな。』

『

慎の顔に笑みが浮かんだ。

透は何も言わず着替え続けた。

進路：

それは透にとって今一番の歎みだった。

一 段 目・6月26日

6月26日、日曜日。午後3時40分。

透の部活引退が決まった瞬間。

相手は昨年の勝者、緑ヶ丘中学。
たつた2点差だった。

大会が終わり、解散した後も透は会場となつた市民体育館の前にずっと佇んでいた。慎達は戦つた緑ヶ丘の選手と話をしていた。

今年こそ全国大会に行く。

ずっとそう思つて練習してきた。それにふさわしい練習をしてきたし、チームの団結も今まで一番良かつた。

なのに、全国どころか県大会敗退なんて…
透は現実を受け入れられずにいた。

「君、大岡中の5番の子だね？」

呆然とする透に一人の男性が近づいてきた。

透は現実に戻り、その男性を見て

「はい。」

と答えた。

多分50代後半で、少し中年太り気味だが背が高く、優しい笑顔の男性。

透はこの人を知っていた。

「私は今尾高校でバスケ部の顧問をしている者なんだが…」

「…知っています。山野先生。」

「ああ、覚えてくれているのか、ありがとうございます。」

「もちろんです。」

というよりも、この辺りでバスケをする人で彼を知らない人の方が少ないだろう。

今尾高校バスケ部は、山野先生が赴任した4年前からどんどん強くなり、県内で唯一、唯野高校と競う力のあるチームである。

彼は今尾高校に移動する前、唯野の顧問をしていた。

彼は、唯野高校のバスケ部を築いた人。そして、今尾高校のバスケ部を築きあげようとしている人。

そんな山野が自分に話掛けてきた。透はとても驚いていた。

「試合、見させて貰つたよ。残念だつたな。」

「…はい。」

「悔しい？」

「はい。」

「何で？何が悔しい？」

「2点差で、1本差で負けた事です。」

透は正直な気持ちを言った。

「それは悔しくて当たり前だ。それ以外には?
「えつ?」

透は戸惑った。彼は何を言わせたいのだろうか?

「君のプレーはとても素晴らしいかった。今田見た中で、私の一番好きなプレーをするのが君だった。」

「ありがとうございます。」

山野先生から言われるなんて、素直に嬉しい。

「しかし、君のプレーには弱点がある。」

「?」

「君は気付いてないだろ?。多分君のチームメイトも。しかし、相手の、縁が丘中学のキャプテンは気付いてしまった。それが今日の敗因だろ?。」

透は理解できなかつた。

「試合の敗因って…」

まるで自分のせいで負けたかのような言われ方だ。しかし、透的にはミスもしていないし、プレー自体に後悔は無い。

「僕の弱点って何ですか?」

そこまで言われたら気になる。

「それは自分で見つけなさい。人に聞くよりも、自分で気付いた方

が成長出来る。」

山野は切羽詰まっている透とは逆で、おおらかに、笑顔で言った。

透は自分のプレーを振り返つてみた。しかしわからない。

「今すぐにはわからないだろうが、そのうきうきと氣づく時が来るだろう。因みに、技術的な問題では無い。君の技術は本当に素晴らしい。君の相棒の8番君も。」

8番君とは慎の事だ。

「…ありがとうございます…。」

しかし嬉しいのか何だかわからない。

「ところで、高校は唯野へ行くのかい？」

「バスケ……………続けないかもせん。」

透は目を見ずにゆっくり答えた。

「そりゃ…。込みいつた事情でもあるのかな？実は…君に我が校へ入つて欲しいと思つたんだが…。」

「えっ！？」

驚いた。

山野先生本人から直接誘われるなんて…。

バスケを始めた小学校の頃から憧れていた唯野高校の元監督から誘

われているなんて！！

「バスケに関係なく、今尾へ入る気は無いか？」

「入れるなら入りたいんですけど…成績が…」

今尾高校は進学校であり、評定4・3以上無いと入れない学校。そして東大合格者が毎年5人は居る学校だ。

その上公立高校の為、特待生制度や推薦は全くない。

「そうかあ。確かにウチは勉強第一で、部活の時間は唯野の2分の1以下だ。前まで唯野で思う存分部活をしていたからな、このギヤップに正直戸惑つた。」

山野は空を見上げ続けた。

「その上生徒のやる気も違う。

唯野はスポーツ推薦があるから、私の誘った巧い子や、バスケがやりたくて仕方ない子が入ってくる。

しかし、今尾は勉強の息抜き程度に考えてる子も居るんだ。」

「とりあえず、君には今尾に入つてもいいたい。そうすれば、絶対バスケ部に入りたい！と思わせるから。」

透は睡然とした。

「さて、そろそろ行かなきやなあ。来年、楽しみにしていろよ。」
そう言って彼は去つていった。

バスケを続けるか…

この数分の出来事により、透は一層悩む事になった。

三段目・放課後

「ふああ～。」

大岡中の教師の中でもイチバン若い、遠藤先生と曰が合ひ。

透はとつさに口に手をあてた。

「水野君、イチバン前の席でそんなに大きなあぐびしないのーー。」

「すみません。」

一応謝るが、若く、背も150センチあるか分からぬ位の遠藤に怒られても全く気にならない。

体育をやって、給食を食べた後の5時間目。
ポカポカとした心地よい天氣。

たとえ前日にたくさん寝たとしても眠くなる。
しかし、透はずつとバスケの事を考えていた。

続けるか、

続けないか。

続けるとしても唯野には行かない事、

慎に伝えなきや。

でも、言つたら慎は

「なんで!?」を繰り返すだらう・・・・・

「水野君!」

隣の席の小野ひかりが小声で透をつづいた。

「ん?」

透が氣づくとクラス全員立つており、全ての視線が自分に向けられていた。

だいぶ熟睡していたらしい。
慌てて起立した。

「水野君、明日は一番難しくしておこうかね。」

遠藤先生が去り際に脅すよつて言つた。

今日は水曜日。

水曜日は職員会議があるため授業は5時間で終わる。

あと、H.Rと掃除を終えれば3時前に帰れてしまつ。

『部活が無いってこいつ事なんだな。。。』

楽だけど、悲しい。

「H.R始めるぞ。」

担任の宮沢俊幸が入ってきた。

宮沢は数学担当のくせに毎口ジャージでいる。

テニス部の顧問をしているからか、40歳過ぎていてのに体育教師並の身体つきをしている。

そんな教師。透にとつて宮沢は好きな方の先生だ。

「知ってると思うが、もうすぐ期末テストだな。このテストの出来次第で志望校を考えて欲しい位の大切な試験だ。」

教室の中がざわめく。

「そこで、今から配るプリントにて志望校を書いてきて欲しい。自分の志望校と親の志望校と書くといふがあるから、ちゃんと親にも聞くよ。」

期限は金曜日まで。これは9月の個人懇談で使うから、しっかりと考えてこいよ。」

透は回されたプリントをぼんやりと見つめた。

「じゃあ後は掃除をしつかりやるようだ。先週はサボったヤツが数人居るからな。時間一杯やるようだ。では終わり。」

『進路かあ……。しかも親に相談……』

透は椅子をゆっくり上げ、考えこんでいた。

「水野君……」

今の透より100倍テンションが高い声が耳に入る。

後ろを向くと、望月舞がいた。

「あ。」

思わず口から出た言葉だった。

バスケの事を考え過ぎて望月の事をすっかり忘れていた。

「ね、今日の放課後ヒマっちょつとで良いから吹奏楽見にこない？」

望月がくつくりの大きな目で見つめてくる。

「あ…今日は慎と公園でバスケする約束してんだ。」

吹奏楽を見に行くなんて…まっぴらごめんだ。

慎と2人で10分をやるといつだけの約束だが、予定があつて良かつた。。。

「30分とか…10分で良いから。見るだけだし、おねがいっ！」

舞が見上げてくる。

その時はまだ舞台上に出でていたチワワのようだ…。

「いや、約束は守らなきゃだし、てか何回も言つてるけど、俺吹奏楽なんてできなによ。」

「そんな事ないって！水野君なら絶対出来るよ。小さい頃からピアノやってたんだし。」

「ピアノは中学入って辞めたし、もうムリだつてば。とにかく、助つ人はやるつもりないから！」

「これ以上何を言えば分かつて貰えるんだ!? 透はイライラしてきた。」

「なあ透。」

『気が付くと慎が透の横に立っていた。』

「慎。」

透は救われた気持ちになった。これで望月から逃れられる。

「悪いんだけど今日用事出来ちゃったんだ。バスケ、また明日な。悪いけど先帰るわ。」

「えっ!? 慎? ?」

透は慌てて帰ろうとする慎を止めた。

「そうだ、透放課後ヒマになっちゃつただろう? 吹奏楽見に行けば良いいじゃん。」

『そういう慎の顔は笑っていた。』

「慎、お前、それが狙いで……」

「じゃあな透。望月サンもバイバイ。」

喋りかけた透を遮つて慎は教室を出て行ってしまった。

望月と田が会つ。

「……じゃあ……練習見に来れるね。」

望月がゆっくりと、伺つよつて言つた。

逃げ場の無い透は頷くほか無かつた。

「でも、掃除終わつてからな。俺、先週サボつちやつたしちゃんとやらね ど。」

「サボつたのつて水野君だつたんだ。」

「あと、慎もだぞ。つてあいつ、また帰りやがつた！――」

舞はこの上ない笑顔で笑つていた。

それを見て、透の胸が音をたてた。

四畳目・恋は盲田?

「慎、おはよ。」

「おひ、おはよ。」

6月30日午前8時。

今までだつたら部活をしていた時間。

『部活してなかつたらこんなにゆっくり学校来れるんだな。』

佐々木慎は今までより1時間遅く学校に着いた。

朝の一時間の差はとても大きい。

いつもなら全く見ないテレビと新聞を見てから学校へ向かった。

靴を履き替え、教室へ向かう。

途中、隣の体育館からボールの弾む音、掛け声が聞こえてきた。
体育館へ繋がる渡り廊下の前でふと立ち止まる。

1年生と2年生が練習している姿が見えた。

なんとなく、頼り無い後輩達の姿。

もし自分が居たら…。

あの試合で勝つてこたりまだ部活出来たのになあ……

無意識に込み上げてくる想い。

『だめだ、そろそろ前に進まなきゃいけない。』

慎はへるひと回つ、へりへりと歩を出した。

「透、めせよ。」

教室に着いた慎は一番前の席に座つてこる透の元へ行つた。

「昨日どうだったんだよ～？ちゃんと告白したかー？」

「……」

「透？」

透の反応がない。

「透どうしたんだ？聞こへるへ。」

慎は透の顔を覗きこんだ。ひつ向つた透の皿はくに向かっていた。

「おこ、何かあったのか？」

透は無言ですっと一息を見つめていた。

慎は透の視線を追つてみた。

「こ、入部届！？」

透の視線の先、透の手には『入部届』と書かれたB5の半分くらいの小さな紙がしっかりと握られていた。

「透、吹奏楽に入部する気になつたのか？」

慎の問いで、透はやつと意識を取り戻した。

「そんなワケないだろ！」

「じゃあ何で入部届持つてんの？」

「つてか慎、昨日ワザと帰つただろ？」

「へへへ。」

慎はニヤッと笑った。

「お前のせいで昨日は散々な目に遭つたんだからな。責任とれよ。」

「責任ってなんだよ？俺はただ、透と望月が二人つきりになる場をセッティングしてやつただけだぞ？」

「お前マジムカつべ。…でも呑丹のがもつとムカつべ。」

「えつ、何何？呑丹に何かされたのか？ もしかしてフラれた？」

慎が楽しそうに聞いてくる。

「だから、呑丹なんてしてないよ。誰があんなサイテーなヤツに告るかっての。」

「ありやー、愛情を通り越して、憎しみの域に達した？」「

「いい加減ウザイぞ慎。」

「すいません。で、何があつたの？練習見に行つたんだろ？」「.

「ああ、誰かのせいで行かざるをえんくなつたからな。30分位で帰るつて約束で行つたんだよ。」

そしたら、音楽室に入った瞬間、吹奏楽部の全員に拍手で迎えられてててさあ……

透は話しつつ入部扉を机の上に軽く放り投げた。

「んで、なんか勝手に
『ありがとう！！ホントに助かるよ』とか色々な子に言わされて困つてたんだよ。」

顧問の須田先生まで

『水野、大会出でくれる氣になつたんだ。ありがとな。
とか言つてくる始末で…。』

望月に、

『俺は見学だけつて言つただろ?』

つて言つたら、

『みんなこんなに歓迎してゐるのに今さら言えなによ。
とか言いやがつて…あり得んだろ?
しかも30分で帰るつて言つてたのに、帰りそびれて合奏も見てく
事になつて、結局練習終わるまで居たんだぜ!…?』

透は早口で一気に吐き出した。

「せりやひじいなあ…」

興味本意で聞いていた慎も段々と透に同情していった。

「まだ続きがあるんだよ。てかこの先が最悪なんだよ。

部活のあと望月とオレ、音研（音楽研究室）に呼び出されたんだ。
行つたらさあ、須田に入部届渡されて、

『これないと活動出来ないから、親にサイン貰つて明日持つてきて』
つて言われたから、

『俺、やるつもり無いんですけど…』つてちやんと言つたんだよ。
そしたら須田が望月に

『水野がやるつて言つたから連れて來たんじゃないの?…
つて聞いたんだよ。望月のやつ、黙りこんじやつてまあ、答え無かつたんだよ。…たら…』

「…そしたら？」

「『ひやさんと答えるよ。』」

つていきなり怒鳴ってきた。

望月が

『嫌つて言われたんですが、見学だけで良いから来てってお願いしました。』

つて言つたら、

『お前は水野の意思を無視してやつせうとしたのか？』
とか色々言つてめつちや望月に對して怒鳴つてんだよ。俺、めつち
や眞まよこじやん…』

「ああ…」

慎の透に對する同情はどんどん増して行つた。

「望月、半泣き状態で、なのに須田はずつと怒鳴つてゐるから、望
月が可哀想で、思わず…・・・」

「思わず…」

「……」

立て続けに話していく透の言葉が止まった。

「…思わず…」

『先生、俺やります』

透は叫ぶように言い、机に突つ伏した。

「アーチー・サウザーンの魔術師だの。」

「あの場にいたらその話しか無かつたんだよ…」

「その後どうなったの？」

『須田のやつ、こきなり態度変えて、
『ホントに? 水野、ありがとう』
つて超スマイルになつて、

『じゃあこれ明日持つて来て
つて言つて入部届渡して、

『下校時刻過ぎちゃつたから急いで帰つてね。』

つて書いて音研から出てつたんだよ。」

「うわあー透、相手の策略にまんまとはまつたって事じやん。」

「それが！！去り際に
『望月、作戦成功したなつ
つて言つたんだよ！』

「え？ ホントに作戦だったの！？」

「そうゆ こと。望月もそれまで須田だつたくせに
『先生、ありがとう』ざこました。
とか笑顔で言つてゐし、須田は
『水野、男に一言は無いからな 。』
つて言つて去つてつた。』

「さすが須田先生。そういう手で今まで男を騙してきてそ'だよな
ー。』

「そ'じやなくて、騙すなんて最悪じやね？須田が居なくなつてか
ら望月に、
『もしかして、2人で仕組んだのか？』
つて聞いたら、望月のやつ…

『引つかかる方が悪いんだよ』

つて言つたんだよつ…！』

「望月つて性格悪いんだな…。』

慎は話を聞きつづけていた。

「んで、いつなったわけ。」

透は全てを吐き出した為、少しスッキリした。

「そんなの詐欺のよ、なもんなんだからやらなきゃ良じやん?」

「もううんざりつめり無いよ……」

「なら何で入部届握りしめてたの?」

「……何でだろ?」

「……」

2人とも黙り込んでしまった。

「水野君おはよー!」

朝練を終えた望月舞が透達の元へやつてきた。

「水野君、昨日は」めんね。ちょっとやり過ぎだつたつて反省したんだ。でも、水野君が入ってくれるから本当に嬉しい！！本当にありがとうね。」

そう言う舞の顔は、今まで透に見せた事のないくらい嬉しいそうな、素敵な笑顔だつた。

透の胸が音をたてる。

「あれ？ 入部届まだ書いてないの？」

机の上に置かれた入部届を見て舞が問いかけた。

「『『入部しない』とか言わないよ……ね……？』

さつきまでの笑顔が急に曇つた。

「あ……やるよ……親に言つたの忘れちやつてや。」

透は立ち上がり、必死に答えた。

「透！？」

驚いた慎が呼びかける。

「ホントに？」

「うん。」

「ありがとー！…水野君大好きー！…」

嬉しそうな舞は大きな声で言いつと同時に透に抱き着いた。

「…？」

騒がしかつた教室が静まり返る。

そして教室中の田線は透と舞に集まつた。

数秒後教室はわざわざわめき出した。

女子のかん高い声が響く。

透の頭は真っ白になつた。

「ちーちゃん、水野君やつてくれるつーー！」

そう言いながら舞は同じ吹奏楽部員の元へ駆け寄つて行つた。

「何かすじい事になつてるな。」

荷物を持ったままの祐介が慎の隣にやつてきた。

「祐介。さつきの見てた？」

「ああ。透、吹奏楽やる事にしたのか？」

「さすが…分かってるねえ。」

「何で急に？」

「『恋は盲田』ってやつだよ。」

放心状態の透を見つつ慎は言った。

「水野君、今日の放課後から部活来てね。」

5時間目が始まる前、慎、陽介と話していたところへ舞がやってきた。

「えつ？入部届は？」

「須田先生に話したら、水野君のお母さんに連絡してくれて、水野君のお母さんから入部の許可貰えたの。だから今日から出来るって。

「

舞が嬉しそうに話す。

「親に連絡したのー？」

「うん。おばさん喜んでたつて。どんな形であれ水野君がまた音楽やってくれるのが嬉しいんだよ。」「

「…分かったよ。」

「掃除終わったらすぐ行くからね。」「

そう言って舞は去つて行つた。

「望月と透の母さん面識あるの？..」

陽介が問ひ。

「ああ。俺と望月は小さい頃から同じピアノ教室通つてたから。同じ学年は俺らだけだつたし、自然と家族ぐるみで仲良くなつたわけ。

「

「その割には透と里用つて話したりしてないよな？」

「それは…ピアノ辞める時、望月に言つたら猛反対されてさ、それで喧嘩になつて気まずくなつたままだつたんだよ。」

「やついえばお前と望月、小学校ん時は仲良しだつたもんなー。俺は面識無かつたけど。」

慎が言つ。

大岡中学校は3つの小学校から生徒が集まる。
陽介は大岡中央小学校出身。慎、透、舞は大岡南小学校出身。
慎は4年生の時に転校してきたのだつた。

「中1の時、クラス離れたからお互い知らんふりしてて、2年で同じクラスになつてもあんまり話さなかつたくせに、いきなりこれだぜ！？」

「そんな事があつたのにずっと望月の事好きだつたんだな。透、めつちやー途じやん。」
陽介が感心したように言つ。

「昔の事なんて気にするなつて。大丈夫ーお前らは今クラス公認力ップルだから。なつ陽介」

「そうやつ。何てつたつて『水野君大好き！』だもんな」

「いい加減その話は止めろよーからかいやがつて。」

「だつて衝撃的だつたもんなんあ。」陽介が言つ。

「あんなに望月に対して怒つてたくせになんでやるって言つたんだよ?」

慎が問う。

「分からんけど雰囲気でさあ…。ま、大会が終わるまでだから1ヶ月くらいだらうし…吹奏楽部ってそんなに強くないだろ?」

「去年は地区大会落ちだつたらしいよ。」

陽介が答える。

「でも今年來た須田先生は去年まで東海大会常連校の指導者だつたらしいよ。練習もだいぶ変わつたつて。」

「そつそつ、昨日練習見たけどスバルタだつた。女なのに男口調だしなあ。」

「ま、スバルタには慣れてるから大丈夫だろ。」

慎が言つた。

「夏休みはバスケ部のOB戦や合宿もあるしちゃんと来いよ。」

「もちろん。」

透が答えた。

四段目・恋は盲目? (後書き)

最後に出てくる祐介は陽介の間違いです。
すみませんm(—)m

五段目：パー カッ ショ ン

「今日から正式に部員になつた水野透君です。」

放課後の部活が始まつてすぐ、透は教壇の上に立たされた。横に居る舞は部員に透を紹介した。

一斉に盛大な拍手が起つた。

「何か一言言つて。」

舞が小声で促す。

たくさんの、知つてるような知らないような顔が透に向けられる。なんとなく、威圧感に負けそうになる…。

「えつと、3年3組の水野透です。吹奏楽は初めてやるので…頑張りたいと思います。よろしくお願ひします。」

言い終えるとまた拍手が起きた。

「みんな知つての通り、水野君にはパー カッ ショ ンをやつてもらいます。分からない事だらけだと思うので色々教えてあげて下さい。」

舞が言つと威勢の良い返事が返ってきた。

「パー カッ ショ ンー？」

透は思わず聞き返した。

「あれ？ 言つて無かつたっけ？ とりあえず挨拶終わるまで待つて。」

「

そうつ言って舞は教壇から降り、透を手招きした。

そういうばどんな楽器をやるか聞いて無かつた。

それでOKしてしまった自分が不思議でたまらない。

「それではパート練習に移つて下さい。」

部長らしき人… 確か1組の平沢まゆが言つと一斉に音楽室から人が居なくなつた。

「水野君、パー カッショ ンの子紹介するから来て。」

舞に促されるまま、大太鼓や鉄琴の並ぶ所へ行つた。

「望月、パー カッショ ンって何だっけ？」

「えつ！？ 知らないの？ ピアノだけど、音楽すつとやつてたの！」

本気で驚いている。

「度忘れただけ。その名前は知ってるんだけど…。」

舞の顔は相当呆れている。

「パー カッショ ンは打楽器の事。太鼓やシンバルとか。」

「ああ、分かつた分かつた。」

「県のピアノコンクール入賞した事がある人がこんな事言つなんて。」

「

舞は嘆くように言つた。

「そんな昔の話するなよ。ま、何かは知つてんだから良いだろ?..
てか打楽器か。何の楽器?」

「まあとりあえずパークッシュョンのメンバー紹介するね。パークス
集合〜!..」

舞が言つと楽器の準備をしていた2人の女の子が集まってきた。

「さつきも紹介したけど水野透君です。」

透は軽く頭を下げた。

「じゃあ一人ずつ自己紹介ね。じゃあ佐智子から。」

舞が指名するとショートカットの元気そんな子が喋り始めた。

「2年2組の下平佐智子です。主にバスドラムを担当します。
「1年3組の森本美希です。グロッケンやシロフォンなどをやって
ます。」

透は「」の子を知っていた。同じ図書委員の子だ。

「で、私がパートリーダーの望月舞です。楽器はスネアドラムとティンパニー。そうそう、あと自由曲の時だけクラリネットの相沢佳代ちゃんがパークッションをやってくれるの。また後で紹介するね。」

「課題曲と自由曲あるの?」

「うん、4曲の中から1曲えらんで演奏する『課題曲』と好きな曲を演奏する『自由曲』があるの。…って知ってるよね。んで、今年の課題曲はマーチ（行進曲）だから人数少なくて良いんだけど、自由曲は5人は居ないと出来ないと曲でね…」

「って事は俺は2曲ともやるの?..」

「うん。」

舞は何の躊躇もなく返事した。

「それで何の楽器?..」

そろそろ教えてくれても良いだろ?。

「ああ、水野君にはシンバルをやつて貰います。」

「シンバル!?」

「うん。嫌?」

シンバル…?猿のおもちゃが脳裏に浮かぶ。

「ま、私が付いてるから大丈夫 美希と佐智子も学年的には先輩だけど、そんなのは気にせず、楽器の事色々教えてあげてね。」

「はい。」

美希と佐智子は大きな声で返事をした。

「今日は30分後から全体練習だから、それまで2人はウォーミングアップと練習しておいてね。私は水野君に色々教えるから。」

舞が言い終えると2人は小太鼓のバチとジャンプ数冊を持って音楽室を出て行つた。

さつきまで40人近くいた音楽室に居るのは、舞と透の2人だけになつた。

「何でマンガ持つてつたの?」

不思議に思つたので聞いた。

「太鼓の革は消耗品だから、基礎練習は雑誌を叩くの。理由は他にも色々あるんだけどね。」

「へえ。」

「じゃあ色々説明するね。えっと… 楽器の名前は分かる?」

「一般的なのは分かるかな。」

「じゃあコンクールで使う主要楽器を説明するね。この小さい鉄琴がグロッケン、小さい木琴がシロフォン、大きい鉄琴がビブラフォン……」

舞はそれぞれの楽器を適当に叩きつつ説明した。

「これらが音階のある鍵盤楽器。次に太鼓類ね。よく大太鼓って言われるバスドラム。」

低いズーンという音が響く。

「そしてこれが私の十八番の小太鼓・スネアドラム。」

軽快なリズムが聞こえてくる。透は昨日練習を見学した時、舞がスネアドラムを叩いていたのを思い出した。

「そしてこれがティンパーー。打楽器の王さま。」

ティンパーーは大きな太鼓が4つならんでいる楽器。

「第一の指揮者だろ?」

透が言った。

「そのとおり。」

オーケストラでティンパーーは第一の指揮者と呼ばれる程重要とされている。

「最後に、これが水野君にやつて貰うシンバル。」

『ジャーンー!』

「わっ! ?」

大きな音に透は驚いた。

「シンバルはパー カッショーンの中でイチバン難しいって言われる楽器なの。」

「えつ? 難しいの?」

「サルにでも出来る楽器なのではないのか?」

「難しいよ。でも水野君なら出来るって信じてるから。」

信じてるって言われても…まだやつてもいいのに。」

「今日はこの後すぐに全体練習だから昨日みたいに見学しててね。多分課題曲だからシンバルの楽譜渡しておくね。」

舞はクリアファイルからA3サイズの紙を取り出し透に渡した。

「ベストフレンド…」

透は書かれている文字を読んだ。

「ナヘ、ひか 課題曲4の曲名。」

「なんだかクサイ曲なんだな。」

「アハニツ事言わなーのー。」

音符を田で追いつめる。

「何これ。四分音符ばっかじゃん。楽譜要りんくね?」

楽譜は単純な音符しか無かつた。

「そんな事言ひたいれるのも今のうがだよ。」

舞は齧すもひに書つた。

「ジーカーー」とへ。

「そのまんまだよ。この曲はずいぶんシンプルな作りだけ、逆に言えぱ」まかしの効かない曲なの。」

「それ、ピアノの先生が良く書いてたよな。」

透はピアノをやっていた頃を思に出した。

「やういえば、多部先生がよくこうね。最近モーショナルトやつてゐるんだけど、やういえば言われたや。」

「まだピアノやつてゐただな。調子せじつへ。」

「調子へ悪くはないよ。でも一年は部活を中心置いてやつてゐるからなあ。」

「そつかあ……」

聞いたものの、何と返せば良いかわからなかつた。といつよりも、辞めた奴が言う事なんてない……。

「つて話がそれちゃつたー部活中は練習に関する事以外の話は禁止だからねー！」

舞が慌てて言つた。

「はいはい。」

2人が話していると、少しづつ部員が音楽室に戻ってきた。

「じゃあ見学しててね。決して寝ないよつこー！」

「それぐらい分かつてるつて。」

「ま、英語の時間に熟睡してたし大丈夫よね～。」

舞が冗談っぽく言つた。

六段目・シンバル

音楽室中に重い空気が流れれる。

課題曲の練習を始めて約20分、須田の怒鳴り声が響いた。

「おこペシト……お前らちやんと練習してんのか！？」

「…はー。」

トランペットのパートリーダー、林友子が答える。

「なら何で何で出だしの1小節が吹けないんだ？」

友子は黙りこんだ。

「こんなんじゃ 全体練習やつても無駄だ。今日は個人練しろ。全体終わり！」

そう言って須田は音楽室から出て行つた。

数十秒間、部員全員止まつたまま動けずにいた。

慎が言つていたようにバスケ部で散々怒鳴られてきたが、やつぱり怒鳴り声に慣れはしない。

というより、女の先生がこんなに怒るのを初めて見たショックかもしない。

『ガチャツ。』

静まり返った音楽室にドアを開ける音が響く。

「望月。」

扉を開け、舞を呼んだのは須田だった。

舞は瞬時に反応し、扉の方へ向かつた。

「お前ら何してんだ！？ わざと練習に行け。」

須田が言つと全員テキパキと動き始めた。

「あ、あと水野も音研来て。」

ドキドキしつつ、透も音研へ行つた。

音研の部屋の狭さが、なんとなく威圧的に感じられる……。

「水野、もうシンバル叩いたか？」

「まだです。」

言葉より先に首を回一回振つていた。

「明日の合奏からシンバルも出来るよ！」
「…」

「えつー？」

透と舞の声が重なった。

「コンクールまで1ヶ月、しかもテスト休部があるから実質半月位しか時間が無いんだ。のんびりやつてのヒマはない。」

須田はなんのためらいもなく言った。

「先生、それはちょっと…」

舞が言つ。透も首を縦に振つた。

「わざと代わりを勧誘せずに、水野が良いつて言つて、バスケ部引退まで待つてたのはお前だろ、望月？」

「は…。」

「もう充分待たせたんだから、明日からやりなさい。そろそろ全体の音を聴かなきゃバランスがとれない。コンクールに間に合わなくな。」

そう言つた須田の顔は深刻で、従うしかないと思つた。

「分かりました。」

舞と透の声が重なつた。お互に驚き田を見合せた。

「あはは、息ピッタリじゃん。その調子でスネアとシンバルも合わせてくれ。スネア、バスドラム、シンバルの三角形が崩れたらマーチは終わりだからな。」

須田は笑っていたが、透には脅しに聞こえた。

「あり得ないよ。」

音研を出た後、舞が言つた。

「てか俺、あの楽譜ならすぐ出来るよ。」

冷静になつて考えてみれば、四分音符と全音符くらいしか無い簡単な楽譜だ。

「悪いけど絶対無理。手を叩くのと同じくらいに考えてるでしょ?」

「……」

『その通り』と言いたかったが雰囲気的に言えなかつた。

「打楽器って『叩くだけでしょ、誰でも出来る』って思われるから嫌なのよね。そんな簡単じゃないのに。」

舞が感嘆して言つた。

「難しそうのはよく分かつた。でもやるしかないだろ?」

感情的な舞とは違い、透は落ち着いていた。

「それはもういるんだよ。」

「でも『絶対無理』って言つたら？そんな気持ひじや出来るわけないじやん。その言葉キライ。」

舞はドキッとした。そんなつむづは無く、流れで出た言葉だったのに…。

舞は『絶対無理』と言つた事を後悔した。

「水野君つひて、昔つから負けず嫌いだよね。」

「はあ？」

「ピアノやつてた頃私の事めつちやライバル視してたでしょ。」

「それはお互い様だろ？俺的には望月のが敵対心強かつた気がするけど。」

「そんな事無いって。水野君がそ、何でも出来やけのやつの意志の強さがあるからだよね。」

「こきなり何言つひんの？」

「ピアノすじく巧いのにキッパリ辞めちやつて…しかもバスケでも有名になつちやうんだもん。」

「有名じやなこよ。本当に巧かったら全国大会行つてただろ？…」

ふと今尾高校の山野先生の言葉が甦つた。

『君のプレーには弱点がある』

『それが試合の敗因だらう』

「じゃあ、吹奏楽で全国大会を目指そー！」

少し暗くなつた透を察してか、舞は明るく元気な声で言つた。

「行けるの？去年は地区落ちなんだろ？」

「去年なんて関係ないよ。『絶対無理』はキライなんでしょう？だから全国大会だって行ける。私は行くつもりだから！」

舞の言葉に迷いや諦めは無かつた。

「りょーかい。」

「やば、喋りすぎちゃつた。それだと練習しなきゃ。時間は限られてるー！シンバルとメトロノーム持つて外行こつ。」

「はーーー。」

音楽室と校舎を繋ぐ渡り廊下の横の日陰で練習する事にした。

自然と透の心は、頑張るつといつ思いと、シンバルを巧く叩く自信で満ちていた。

が、この自信はすぐ打ち崩された…。

「違う。」

シンバルの練習を始めて30分以上、舞はずつとこの言葉しか言つていらない気がする…。

「もつとシンバル全体を響かせるの。ジャーンって。」

「そんな抽象的な事言われたって分からんって。」

透は全く口を摑めずにいた。

「大切なのは脱力。トライアングルを強く握つて叩いたら響かないでしょ？それと一緒に。身体中の、特に腕の緊張を無くして、自分の腕も楽器の一部つて思つて叩くの。」

「りょーかい。」

透は一度シンバルをスタンンドに置き、深呼吸をした。

身体中の力を抜きリラックスしもう一度叩いてみた。

「ジャーーン」

「あっ、今の良かった！」

舞が嬉しそうに言つ。

「ちょっとだけイメージ分かつたかも。」
感覚が、なんとなくバスケのショートをする時に似ている気がした。

「忘れないうちこもづ一回やろ。」

透は頷きもう一度叩いた。

『プスッ。』

「あれっ？」

音が鳴らない。透は驚き手元をずっと見つめた。

「それは空気が入っちゃったの。両方のシンバルがぴたりと重なると空気の逃げ場が無くなつて音が響かないんだ。だから2枚をちよつとズラして叩くつて言つたの。」

「そうだった、忘れてたや。」

もう一度叩いてみる。

『ジャーン。』

「上手い上手い。やっぱ腕力あるから安定してると上達が早いね。
じゃああと20回くらい叩いたら次進もつか。集中すれば出来るか
55°」

「はこぶ。」

途中4、5回やり直しなつたが透は20回叩き切った。

「オッケー。今のが全音符とかの基本ね。次は連打、四分音符の練習ね。」

「じじじや。でもちょっと休憩しよ。水飲んでくる。」

約1時間、日陰とこえど夏の野外でシンバルを叩き続けるのは、思つた以上に疲れる事だった。

「じゃあ5分休憩ね。」

「…やつぱだめ。」

「えつ?」

校舎内へ行こうとしていた足を止めた。

「みんな戻つて来てる。もう時間だ。」

「えつ、もうつ。」

管楽器の子が続々と音楽室へと戻つてゆく。

「どうしよう。まだ全く連打やって無いこのままではダメでこんなで…」

舞は言いかけて止めた。

「ムリって言おうとしたんだろう?」

透が問う。

「止めたもん! それより早く音楽屋戻らなきゃ。行こう。」

「はいはー。」

透はシンバルとスタンドを持ち上げた。

『あつ、 夏の匂い。』

心地よい風に夏の訪れを感じた。

七段目・進路

「ただいまー。」

「あー、お兄ちゃんだー。おかえりー。」

妹の美沙がリビングから出てきた。

「透おかえり。吹奏楽やつてきたの?」

母親の恵美子の声がキッチンから聞こえる。

「ああ。」

「やつかー。お疲れさま。もうすぐ飯出来るから着替えてきなさい。後で話聞かせてね。」

透は2階にある自分の部屋へ向かった。
階段を登る足がなんとなく重い。

「疲れたー。」

部屋着ぐと同時にベットへ飛び込んだ。

部活の後、舞と一人で近所の公園に行き約1時間ほどシンバルの練習の続きをしてきた。

なのに全く上達しなかった。

本当に、見た目以上に難しい。
サルには叩けないだろ？。

『着替えなきや。制服シワになるよなあ……』

分かつてはいるが動く気がしない。

2時間くらいシンバルをやつただけなのに……。これごときでこんなにだるいなんて。

仰向けになり腕を上げた。

その腕にはしっかりと筋肉が付いている。

この3年間で腕は太く、逞しくなった。腕だけではない、身体全体が力強くなつた。背も15センチも伸びた。
全部バスケの効果だらう。

なのにこんなに疲れるなんて……

『部活終わつて体力落ちたかなあ。』

ベットにこると眠気が襲つてきた。

『お兄ちゃんーー』飯出来たよ。。

うとつとしかけた時、階段の下から妹の声が聞こえてきた。
しぶしぶ着替え、リビングへ向かつた。

「吹奏楽はいいわ。」

食卓に着くなり母が尋ねてきた。

「お兄ちやん吹奏樂やるのー。」
美沙が目を丸くし驚く。

「お母さんびつくりしたのよ。学校の先生から電話掛かってきたから透が何かやらかしたのかと思つたわ。」

「ひじょ。」

「何の楽器やるの?先生は打楽器としか教えてくれなくて…。」

「シンバル。」

「へえー両立つじやない。打楽器だから舞ちゃんと一緒になんでもよ。」

「わいだよ。」

『舞』とこの言葉にドキッとしてしまつが気にしない素振りをする。

「舞ちゃんはすいこわねえ。勉強も出来るの!部活とピアノを両立して!。」

「両立しなくて悪かったね。」

「そんな事言つて無いでしょ。」

一言一言甲高い母親の声がイライラを増加させる。

「何でそんなに苛ついているの？」

答える気がしない。

「お母さんが舞ちゃんばかり讃めるからだよ」

美沙が笑いながら叫んだ。

「ばか。ちげーよ。」

透はキツパリと否定した。

ただ、舞の話を家族でしたくないのは確かだった。

「やつてみてどうなの？楽しい？」

「まだ分かんないよ。今日始めたばっかりだし。ただ楽しくなる事は無いと思う。」

「透疲れてるでしょ？」

「別に。」

「顔に出でるわよ。それに透は疲れると怒りっぽくなるからすぐ分かつちゃう。」

返す言葉が無かつた。美沙が笑う。

「やつやつ、進路調査の紙、畠山君出でしよ。」

「やーいえば。」

すっかり忘れていた。

「どうやるの?」

「まだ決めてない。」

「唯野高校の推薦はビツなの?」

「何で知つてんのー?」

母にま全く話して無かつたのだった。

「昨日のP-T-A集会で慎ちゃんのお母さんに聞いたの。慎ちゃんは唯野行くんでしょ?」

「やつ言つてた。」

「何で推薦の話してくれなかつたの? とつてもそこお話なの?」

「本気でやつ思つてんの? てか唯野行く気は無いから。だから推薦の話もしなかつた。」

母は黙りこんだ。

美沙は気まずいのか、テレビに夢中なフリをし、黙々と「」飯を食べ

ている。

「…お父さんの事気にしてるの?」

母が重い口を開いた。

「約束だから。卒業したらこの家は出でくよ。」

「だから何回も言つてるじゃない、お父さんとは話をつけ、お母さんがずっと2人とも育てるつて…!」

「感謝料貰つて無いんだから大変でしょ。それに父さんだつて寂しいだらうじ。」

ちょっと今までの笑いがあつた食卓は遠い昔のようになってしまつた。

父と母は一昨年離婚した。

元々出張が多くつた父はほとんど家には居なかつた。

そのすれ違ひと、仕事しか頭に無かつた父に耐えきれず、母の方から別れてと言つたのだった。

感謝料は請求しなかつたが、父は出張が多いことから家は母の財産となつた。

その時、子どもの親権問題が浮かび上がつた。
父も親権を強く求めた。しかし、透は転校したくないという理由で、
美沙はまだ母親の存在が必要だうといふ理由で母と住む事に決め

たのだった。

透は、親権が決まった時の父の寂しそうな顔が忘れられなかつた。

そこで、中学を卒業したら父の元へ行くと約束したのだった。

母は未だに猛反対をしてゐるが…。

「お父さんと一緒に住む事にしたら唯野高校はもっと遠くなつて行けなくなるわよ。」

「だから、唯野は行かないって。っていうか私立は行かないから。進路調査は富沢先生に理由を話して延期してもいいわ。せめて今は話さなきゃだし。」

「透…」

「やっぱ俺疲れてるわ。母さんの通りなんか怒りっぽいし。ちよつと休んでくれ。」

透は部屋へ戻つた。

家に帰つて来た時と同じように飛び込んだ。

透的にはじみの親と暮らしたいなどの思いは無い。

自分をピアーストにしたかった母。

そのスバルタな指導から救つてくれ、一緒にバスケをやつてくれた父。

色々言いつつ、今はバスケをする自分を応援し、栄養のとれた食事を作ってくれる母。

二人とも大事な親だから…。

壁に掛かっているユニフォームを見つめる。

本当は、本当は…唯野へ行きたい。

唯野へ行つて慎と共にバスケ部へ入りたい。

でも、父の家はこの家から電車で一時間以上掛かる。つまり唯野まで一時間程掛かるのだ。

部活をして片道2時間もかかるのは…しかも男2人での生活。難しいだろう。

そして何より唯野は私立高校。

母と暮らす事にしたら間違いなく私立なんか行けない。

つまり、どっちの親と暮らすにせよ唯野へは行けないのだ。

『唯野じゃなくったってバスケは出来る。』

何度こう考えたことだろう。

でも、どうせやるなら憧れの唯野へ行きたいと考えてしまつ……。

自分の高校生活の想像が全くつかず、考える度呆然としてしまつ。

吹奏楽の練習疲れもあってか、考えている間に眠つていた。

八段目：一日の始まり

『ジリリリ...』

AM 6:10

透はベッドから身を起こし田舎まし時計を止めた。

なんだかんだで昨日は9時頃寝てしまつたからか、いつもより田舎
めが良い。

顔を洗い、服を着替え、髪の毛をワックスで無造作っぽくあげる。
全ての準備が出来た後、透は深く息を吐き、部屋を出た。

階段をゆっくり降りる。

リビングからは物音が聞こえてくる。

困るのは99%母だ。

昨日の事が鮮明に蘇る。

母に会いたくない。

「飯を食べずに学校へ行こうかとも考えたが、そんな事したひず
と気まずいまだ。

透はリビングの扉を開けた。

「あら、透おはよう。部活終わったのに早いわね。」

母は至つて普通だった。

「吹奏楽の練習あるから。これから夏休みまでずっとこの時間。」

「やつだつたわね。部活は終わつたけど」これからも早起きして、飯作らなあや。あ、今日せむつ出来るかい？ ぐ盛るわね。」

「あ…ありがとうございます。」

透はある事に気が付いた。

母はいつも自分がより早く起きて、飯を作ってくれる。

でも、母の仕事は9時からだし、自分が部活をしてなかつたらこんなに早く起きる必要は無い。

なのに3年間何も言わずに栄養満点の朝食を食べさせてくれた。

それを当たり前に感じてしまい、感謝する」とも忘れていた。

自分はこんなに母に苦労をかけときながら、一緒に暮らしたことこの母を拒否し、父と暮らすとしてるんだ…。

ふとそんな考えがよがり、母に申し訳ない気がしてきた。

「考えただけじね、今度お父さんと一緒に二人で話そつか。」

テーブルに、飯、味噌汁を置きつつ母が言った。

「えつ？」

いきなりで、透は驚きを隠せなかつた。

「昨日の夜お父さんに電話したの。もちろん透の進路の事でね。そうしたら、3人でちやんと話し合おうって。お父さん日曜ならいつでも大丈夫って言ってたから近いところに行きましたよ。透もそろそろ…ちやんと志望校決めなきゃだしね。」

「…分かった。」

正直理解しきれていたが返事をした。

母さんは父さんに連絡を取ったんだ…。あんなに嫌っていたのに。しかも3人で会うのなんて、離婚のゴタゴタ以降初めてだ。

「富沢先生に上手く伝えられる? あれならお母さんが電話するけど…。」

「それ位大丈夫だよ。そんな子どもじゃないし。」

「あはは。そうね。じゃあ先生にちやんとお話ししておいてね。」

「了解。」

透は急いで飯を詰め込んだ。

「あ、これからまた帰るの7時過ぎになるから。」

「うん。吹奏楽も頑張つてね。大会お母さんも見に行くから。大会何日にあるの?」

「7月中だったとは思つけど…こつだつけ？」

「知らないの…？ちゃんと聞いて来てね！」

「はいはい。いちそうさま…あ、…部活終わったのに早起きせちゃって…迷惑かけてごめん。」

さつき思ひた事を伝えてみた。

「こわなりどうしたの？迷惑なんて思つて無いわよ。透がまた音楽をやつてくれるの嬉しいし、それに透が何かに一生懸命なり母さんはそれを応援するわよ。」

母は笑顔だった。

「…ホントありがと。それと昨日ごめん。」

透は田線を下に向けたまま言つた。

母は何も笑顔で言わず頷いた。

「行つてきま す！！」

透はいつも通り学校へ向かつた。

父さんと会うのはお正月以来だ。毎年正月以外は部活が忙しくなかなか会えなかつた。

しかし、今はそれ所ではない。学校へ近づくにつれ、気持ちは進路から吹奏楽へと変わつていった。

『明日は朝から全体練習あるから。』

昨日舞が言つていた。

つまり1時間後には全体練習でシンバルを叩かなければならぬ。

昨夜もシンバルの事は頭にあつたがそれよりも、昨日の透には母との言い合いの方が大きかったのだ。

一気に気持ちが重くなる。

「早く行つて練習しよ。」透は走り出した。

九段目・プライド

「おっ、水野。早いじゃん。どつしたの？」

音楽室に行くとまだ須田先生しか居なかつた。

「練習しようと思つて…。」

『どつしたの?』は無いだろ…。

「練習は7時以降からだからな。今日は特別に私が見てあげよつか?」

「えつー!?」

一気に緊張する。

「ほら、やってみて。」

「こわなりー?」

「別にウォームアップも無いだろ?」

「そんなこと…」

そういうえばウォームアップを教えてもらつてなかつた。シンバルにもあるのだろうか…?

とつあえず手首を回してシンバルを持ちあげた。

「じゃあミチで一発叩いてみて。」

「はー。」

深呼吸してふりかぶつた。

「ジャーン。」

多分ダメな音だ。

『良い音か分からぬ時は全部ダメな音だから。良い音はすぐ分かる。』

昨日の舞の如言だ。よく分かんぬ時はダメって事だ。

「やっぱまだ無理かあ。水野、やっぱまだ全体練習出なくて良いから。」

「えつ?」

せつかく意氣込んで来たのに…。

「そゆこと。じゃあ練習頑張れよ。」

須田はそう言い残し音楽室を出て行つた。

透はあつけにとられた。

昨日あんなに真剣に話していたのに。

てか何も教えて無いじゃん。。。

「水野君早いね。おはよ。」

舞がやつてきた。

「…おはよ。」

「どうかした?今日は水野君の初全体だから頑張らなきゃねー」

「望月…せつしき須田先生がまだ全体練習出なくて良いって言つた。」

「えつ?ホント?」

「うふ。」

「うふと須田先生と話してくる。水野君は練習してて。」

舞は音楽室から出て行つた。

シンバルを持ち上げる。

『やつぱり音鳴らせなかつたからかな。』

しかし、一発聞いただけで決めるなんて…。

透は昨日舞に言われた事を思い出してシンバルを叩いた。

透が練習してこないと部員が続々と登校してきた。それと一緒に舞も戻ってきた。

「須田先生何て言つてた?」

「まだ全体に混ぜるのは早いつで。」

「そんなの当たつ前じゃんーなのに自分で書つたんだが?..」

「水野君ならもっと出来てると思ったんだつて...。」

よく分からぬけど…何だか悔しい。
一生懸命やつてるのに認められない。

透のプライドが何かを放つた。

これにより透の気持ちは本当の意味で少しずつシンバルに向き始め
る。

九段目・プライド（後書き）

この章は後で書き直すかもしれません…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5666b/>

夢への階段

2010年10月28日08時13分発行